

私の名前はヨシカゲ・
キラ 目指すものは心
の平穏

ドリーム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無数の手に引っ張られて、気がつくと私はヨシカゲ・キラになっていた。

魔法があり、美しい『彼女』がいつぱいいるこの世界で…今度こそ平穏に生きて見せ
るぞッ!!

しかしどの世界でも苦手なものはある。リンネ・ベルリネット…虐められてる彼女が
『クソッタレな奴らと同じ目』で私を見ている。

私を後ろから救つてくれたヨシカゲ・キラ君。ちょっと近寄りがたい雰囲気とどこか
で見たことのある懐かしさを持つ彼に私は少し惹かれていた…

これはそんな『一度失敗した殺人鬼』と『格闘技の才能を秘めた少女』の話。

目 次

私の名前はヨシカゲ・キラ	——	1	ヨシカゲ・キラは霸王が嫌い	その①
ヨシカゲ・キラ (吉良吉影) のプロフィール	——	11	ヨシカゲ・キラは霸王が嫌い	その②
ヨシカゲ・キラは争いが嫌い その①	——	14	ヨシカゲ・キラは霸王が嫌い	その③
ヨシカゲ・キラは争いが嫌い その②	——	22	クソツタレ共の逆襲 その①	58
嫉妬系男子はスタンド使い その①	——	66	クソツタレ共の復讐 その②	——
嫉妬系男子はスタンド使い その②	——	76	クソツタレ共の復讐 その①	50
ヨシカゲ・キラは霸王が嫌い その②	27	76	ヨシカゲ・キラは霸王が嫌い	その④
ヨシカゲ・キラは霸王が嫌い その①	34	11	ヨシカゲ・キラは霸王が嫌い	その⑤

私の名前はヨシカゲ・キラ

私の名前は吉良吉影、ここではヨシカゲ・キラと言う。戸籍は大事だからね。年齢は10歳。タバコは吸わない。というか吸っちゃいけない（年齢的に）。酒は嗜んでみた
い年頃。幼少期は孤児院で育ったが、1年前にキラの家に引き取られてヨシカゲ・キラになつた。学院や外に出かけても遅くとも夜8時には帰宅する。寝る前に軽くストレッチをして暖かいミルクを飲んで床につくと朝まで熟睡さ。年に数回学院で行われる健康診断でも異常無しと言われたよ。

え？ 何故そんな個人情報をペラペラしゃべるのかって？

まあまず最後まで聞きなよ。

私は常に心の平穀を願つて生きている。妙なトラブルを起こさないとか敵に怯えて生きていくとかそんなものはまっぴらだ。まあ：戦つたとしても私は誰にも負けんがね：

で、さつきの質問の答えだがその前にもう一つ言いたいことがある。

：私は生まれ持つた恐ろしい性さがを背負つていて。昔は押さえよう押さえようと努力

したが、人間が爪を伸びるのを止められないよう、生まれ持った性を押さえる事はできない。

だから前向きにその性と向き合っている。しかし、この行為は他人に見られて理解されるとは思っていない。

時間かけて済まないね。質問にやつと答えるが：

――――――私の正体を見た君にこのヨシカゲ・キラを教えていたんだよ。君はすでに始末されているからね――――――

正体を知った君を生かしてはおかないよ――――――

始末させてもらう。我が能力『キラーケイーン』の爆弾で――――――

カチツ

△▼△▼△▼△▼△

学生である以上、学歴を保つために学院には向かわなくてはならない。

このヨシカゲ・キラ：あくまで敵を作らない、トラブルを避けるため日々活動している。できるものには手を抜き、だからといってふざけず授業を受ける。親しい友人を作

らず、だからといって孤立はせず、微妙なバランスが難しい：
平穏を目指すため多少の苦労をしよいこまなくてはならないなんてのは仕方が無い
ことだろう。

学院につけば取り合えず本を読む。内容は管理局についてだ。私がしている行為上、
必ず関わりができてしまう。どうすれば奴らの捜査線上の立たずに済むか：すでに一
度失敗しているこの吉良吉影：ヨシカゲ・キラとして生きる以上、絶対に幸福に生きて
見せる。

ぶち

「！」

しまつた：つい力が入つて本を破いてしまつた。経験上、幼少期から体は鍛えていた
が、この体：予想以上に効果が出てしまい力の制限が難しい：徐々になれていかなくて
は…いつかぼろを出してしまう。

「落ち着け吉良吉影：」

「ど、どうかしましたか？」

「何ッ！」

「ひ…」

声の方向を向くとそこには隣の席の：確かリンネ・ベルリネット：だったか。彼女が

おどおどと話しかけて来ていた。

「ほ、本のページが落ちましたよ…」

「…済まない、考え方をしていた。ありがとうベルリネツタさん」

動搖するな吉良吉影…神経質過ぎるぞ…この学院で私の正体を知るものは絶対にいない。リンネ・ベルリネツタもただ落ちたページを拾つただけだ。

「す、スゴイ力ですねキラ君。生れつきですか？」

「いや、諸事情で鍛えていてね。別に格闘技をしてるわけじやあないんだがね…そろそろHRだ。席についたほうがいい」

「あ、うん。ありがとう」

リンネ・ベルリネツタは席に着く。しかしその勉強机は正直、見ていてよい気分のものではない。

彼女は続に言う虐められっ子だ。よくクラスメイトの三人の女子（名前は興味無し）に虐められている。

机に彫刻キットか何かで掘られて悪口が刻まれている。ペンでも悪口。そして中身はゴミの山だ。

まあ関わるだけ無駄だ。この吉良吉影にとつて重要なのは彼女に関わると虐めの対象に私も入ってしまう事だ。同情はしないし救いもしない。これが昔からの吉良吉影

のスタンスだ。

しかしながら胸騒ぎがする。何かの前兆か？

△▼△▼△▼△▼△

「昼休み」

△▼△▼△▼△▼△

「リンネ視点」

「ベルリネットさん、ちょっといい？」

「ニヤニヤ」

「はい……………あ」

今日もまた……つて思つて席を立つと隣のキラ君席からキラ君の昼食と思われる『ミッ
ドジエルマン』というサンドイッチのお店の袋が落ちている事に気づいて私はそれを拾
いました。

「あ、それ『ミッドジエルマン』の袋じゃん」

「おいしいよね」

「ちょっと私たちにも分けてよベルリネットさん」

「え、こ、これは私のじや…」

「言い訳はいいから、取り合えずいつもの校舎裏に行こつか」

「あ、だから…」

私はこの時心のそこから「キラ君ごめんなさい」と思った。それと同時に他人を巻き込んだ自分の弱さに自己嫌悪した…

△▼△▼△▼△▼△

♪キラ 視点♪

馬鹿な：ほんの数秒だった筈だ。教壇にいる教師に係の仕事を終えたことを報告した1分にも満たない時間に私の『ミツドジエルマン』の袋が無い…

まだそれだけなら苛立つ程度でいい。

しかしあの袋の中には『彼女』がいるッ!!これでは前回の二の舞だッ!!

すぐさま廊下に飛びだし、周りを見渡す。

一番可能性があるのはリンネ・ベルリネッタだ。おそらく彼女自身取る気はなかつただろうが彼女の周りにはあのゲス共（いじめっ子）がいる。なんかの偶然で彼女が持つてている可能性が高いッ!!

「ど、どこだッ!!」

すると後ろから、

『リンネさんかわいそうだね♪』

『でも関わつたら私たちも虐められるし、』

『校舎裏には近づかないようにしよう』

校舎…裏…!?

そこだ。リンネ・ベルリネツタとゲス共はそこにいるッ!!

クソッタレ、このまま『ミッドジエルマン』の袋を開けられたら…

『な、何で『手』だけ袋に入れて持ち歩いているんだどッ!?』

させるかッ!!

△▼△▼△▼△▼△

「さて、さつさとその『ミッドジエルマン』寄越しなさいよ」

「そーだそーだ」

「さつさとしてよ」

これはキラ君のもの、絶対に渡しちゃいけない。これは私の問題で他人のキラ君をま

きこんじじやいけない…

『言うんだ…!これは私のじや無いって…』

「はーやーくー」

「こ、これは…わ、私のじや」

「はあ、もうのろいわね〜、さつさと寄越しなさいって言つてんのよッ!!」

あああああ、このままじやキラ君にも見下される…
きつと言つても私が盗んだつて言われて…このままじや…

「ヤード」開帳

「ワクワク」

ボンツ

しかし袋を開けようとした指が火をあげて吹っ飛んだ。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

「こつちだベルリネットさん」

すると隅から誰か出てきた。そこにいたのは…

キラムグツ!

黙つてこつち来てくれ」

キテ君に引つ張られて、私はそのまま無我夢中で教室まで走った。

ギテ君の背後に猫型のお化けかいたことを…

△▽△▽△▽△▽△▽

『ギタークリーン』 第一の爆弾

この指先に触れたものはどんなものだろうと爆弾に変えられる。例えば袋止めの

シールとかもね。

しかしなんて災難だ…

『彼女』はおそらく誰にも見られなかつたが止む得ずスタンドを使つてしまつた…

「き、キラ君」

「……何かね…」

追求されるか…くそ、こうなつたらリンネベルリネツタも…

「ありがとう…」

「は？」

「キラ君は多分何もしてないんだと思うけどあの場から盗んだかもしれない私を助けてくれて私はとても助かりました。ありがとう」

……虐められてる癖にあいつらと同じ『目』をしている…

しかし何だ…？あの『クソツタレな奴ら』と同じ目をしているリンネ・ベルリネツタを…とても美しく見えた…

いや…気の迷い、動転から来るものだ。きつとそうだ…

袋の中の『彼女』を消滅させてしまつたのもそのせいだ…

私は決してリンネ・ベルリネットに心を緩してもいいんじゃないかななんて…思つてい
ない…

ヨシカゲ・キラ（吉良吉影）のプロフィール

ヨシカゲ・キラ

10歳

男性

ミッドチルダのある学院に所属。

スタンド—キラーキイーン

ステータス—破壊力—A スピード—B 射程距離—D 持続力—B

精密動作性

| B 成長性—A

能力—手で触れた物を「爆弾」にする能力

第二の爆弾

シアハートアタック

ステータス—破壊力—A スピード—C 射程距離—A 持続力—A

精密動作性

| E 成長性—A

能力—キラーキイーンの左手に装着されている、戦車のようなスタンド。

「熱」に反

応して対象を自動的に追尾し、爆発攻撃する。

第三の爆弾

バイツア・ダスト（負けて死ね）

ステータス——破壊力——B　スピード——B　射程距離——A　持続力——A　精密動作性——D　成長性——A

能力——吉良吉影の正体を知る、「スタンド使いでない人間」に憑依して発動する。その間キラークイーンは憑依した人間を完璧にガードし、敵からの攻撃や自殺を防ぐ。

その人物から吉良の正体の情報を得ようとすると（憑依された人間から教えようとしたかどうかは問わない）ことで発動、吉良の正体を知った人物を何人でも全て確実に爆殺する。抵抗は不可能。同時に時を1時間ほど戻す（時間そのものを『爆破』し、無かつた事にする）。

時間が戻る前に起きた出来事は『運命』として残り、バイツア・ダストを発動している限り時間が戻った後でも再現される。例えば『爆死すること（吉良の正体を知つて爆殺される→時間が戻る→吉良の正体を知つても知らなくても、同時刻にはひとりでに爆死する）』などは『運命』の例である。

時間が戻った事はキラークイーンに憑依されている人間以外は感知する事が出来ない。

ヨシカゲ・キラのプロフィール

あるとき孤児院の前で置き去りにされていたキラ（1、2歳程度）。孤児院でヨシカゲという名前をもらい育つたが、実はその少年はジヨジヨの第四部に登場する最強の殺人鬼『吉良吉影』が『振り返ってはいけない小道』で振り返ってしまい亡靈となるはずだったがどんな偶然か、亡靈にならず、転生してしまった姿。

見た目は死んだときの容姿は元の吉良吉影だったが、肉体は川尻浩作の皮を被つていたので川尻浩作の少年時代のものになっている。つまり目が死んでる。

スタンドは健在で、ストレイキヤツト（空気操作のスタンド使いの猫が死んだ後に草

に生まれ変わったもの）はいないので空気弾は撃てない。

相変わらず女性を密かに殺し、美しい手を愛でている。

しかしあの事件（第一話）が原因でリンネ・ベルリネットに恋する。一応ジヨジヨファンじやない人のために言うと恋ではない。

ヨシカゲ・キラは争いが嫌い その①

朝、赤ん坊のように熟睡した体で起き上がる。

ヨシカゲ・キラとしての生活にだいぶなれてきたぞ。今、私の記憶は大半が『吉良吉影』のものだ。どうも科学的にも進歩したこの世界での暮らしになかなか馴染めなかつた。

「しかし気分のいい朝だ。『彼女』が健在だつたらどんなによかつたか…」

以前、誤つて『彼女』を爆発させてしまい後悔している。

…やはりトラブルに関わるとろくなことが無い。これからはもつと注意深く行動せねば…

「さて、しつかり朝食を取つて学院にいくとしよう…」

週末当たりに新しい『彼女』を見つけて来るか…ククク…



我がスタンド『キラーキーン』には触れた物質を爆弾に変える能力がある。

自慢じやあ無いがね：私自身、戦つて負ける気はさらさら無い。しかも私は一度敗北を味わっている。人間つて言うのは失敗から学ぶ知性があるから強くなれる。孤児院時代の時、同じ孤児院にいたやたらと記憶力のいい少年が言つていてね：

私もそう思つている。経験上尚更ね：しかしこのヨシカゲ・キラ。『争い』はどうしても嫌いだ。一つの戦いに勝つことはとても簡単だ。しかし、次の戦いのためにストレスなんて味わいたくない。それは今も昔も同じだ。

だから…

「ちよつと君く：今結構財布の中潤つてたよねく」

「俺達今困つててさく：貸してくんねかく？」

こういう輩ももちろん嫌いだ。しかもこういう無駄に友情とかそういうのに溺れる奴は一度手痛い目に合わせると『報復』という感じで付け狙つて来る：

「…すいません。このお金は学校で教材を買うのに必要なんです。もうすぐ試験ですから…だから別の人当たつてくれませんかね？」

「んな事はどうでもいいんだよッ!! 俺達が金が欲しいつて言つてんだからてめえは金をわたしやあいいんだよこのクソガキがッ!!」

全くこれだから知能の無いクソツタレ共は…

精神衛生上、苛立ちは押さえなきやいけないつてのに…
スツと財布を差し出す。

「お、物分かりいいじやねえか僕〜」

「そうそう、最初からそうしていればいいんだよ」

「そうかい、それはよかつたな…」

カチッ

「あ、あれ？ お、俺の指どうなつて…」

『キラーキーン』

「ボブエ（ドガア――ンツ!!）」

「お、俺のダチコウが：（ドガア――ンツ!!）」

「ありがとう。苛立ちがおさまったよ…」

証拠は決して残さない…

それが『キラーキーン』の強みだ…



（リンネ視点）

あれ以来虐めは行われなかつた。しかし、噂は流れ始め、誰も私の近くにはよつて来なくなつた。2時休みの時間、まるで私から遠ざかるようにならぬくなる。

ヨシカゲ・キラ君。私を助けてくれた人。彼はなにもかも無関心と言うばかりに一人で『ミッドジエルマン』のサンドイッチを頬張っていた。

珍しい黒い髪に黒い瞳に、どこか近寄りがたい：けれど昔あつたことあるような懐かしい感覺。私は失礼を承知で：彼にどこかで親近感を湧かせていた：

A vertical sequence of eight alternating white and black downward-pointing triangles.

キラ視点

第一管理世界『ミツドチルダ』…『杜王町』に比べればまだまだだが…こもなかなか
か住みやすい…空は朝なのにまるで星空のようにいくつもの星が見える。日差しがよ
くピクニツクに来てる気分だ。今度『彼女』と一緒に公園でランチでもしよう。『彼女』
と一緒に選んだサンドイッチを片手に…フフフ…週末はゆっくりすごそう…ククク…

こういう場合……どうしたらよいものか……

下駄箱の中にハートのシールが付いた手紙

：吉良吉影の時にも似たような事はあつたが……正直帰りたいな。面倒だ。
気付かない振りをして帰るとするか：

そうだ。一個下の段に入れよう。そうすれば手違いという事になる。
我ながらいい案だ。

さて、帰るか。

そうだ。もういつそのこと今日、『彼女』を手に入れるとしよう…

△▼△▼△▼△▼△

「フフフフ、ああ君は実に可愛いよ。今日からずっと一緒に居ようね。『手切れる
時』まで…ククク」

清々しい気分だ。自分の欲求を満たしたときの開放感を不快に感じる人間はあるか
な？いや、いない。爪が伸びるこの時期、衝動が押さえられなくなる。我慢するつてい
うのは、体にも精神的にも良くない事だ。前向きになることも大事だよ。
前向きにね…

「おつと、もう7時50分じや無いか：彼女探しに夢中になりすぎていたよ：それじやあ『エリリさん』私の家に帰ろうね：緊張しなくとも大丈夫だよ。週末はピクニックにでも行こうと思うのだが…」

『エリリさん』をほお擦りしながら帰路に着くしかし…

『ヨシカゲ・キラ』さん…ですよね…

「何ッ!!」

すぐさま『彼女』を懐にしまい振り返る。

このヨシカゲ・キラの名前を知つているだと…：

「誰だね…君は…」

「申し遅れました。私の名は

カイザーアーツ正統 ハイディ・E・S・イングヴァルト…『霸王』を名乗らせていただいています」

霸王：だと？

何故私の名前を知っているのか…
クソッタレ…やはり最近運が悪い…



『キラーケイーン』

本体—ヨシカゲ・キラ（吉良吉影）

破壊力—A

スピード—B

射程距離—D

持続力—B

精密動作性—B

成長性—A



n
u
e
d

ヨシカゲ・キラは争いが嫌い その②

「霸王…だと…」

「はい、おそらくあなたが考へてゐる『霸王』で間違ひありません」

霸王――――――

古代ベルカの時代を生きた王の一人。確かに以前見たなんらかの書物で書いてあつたな：

いや、重要なのはそこじやない。

何故このヨシカゲ・キラの名前を知つてゐるかだ：

私が普通に名前を明かしてゐるところなど学院しかない：しかしこの女どう見ても

私より年上だ。同じ学院にいるとは考へられない…いや…ああ、そういうことか：

「何故、私の名前を知つてゐるんだね？私は別に有名人つて訳じやがないんだが…」

「以前、あなたが近所のジムに通つているとき、私もたまたまそこにいました」

（あの頃はまだ基本もかねて一時的に、格闘技での私がこれからは習得する霸王流において『スポーツ』か、『戦い』かをしつかり区別させるために通つていきましたが…）

ジムか：確かに数ヶ月前まで通っていたな。失敗からの学びとして体力をつけた
かつたんだがね…

しかしその時何かしてしまつただろうか…

「あなたはずつと一人で練習をしていましたよね。それだけなら特に気にしていませんでした…しかし、あなたの拳には…失礼を承知で言いますが、

……………『人を殺すための拳』に見えました』

……………なるほど。さすがは霸王関係者と言つたところか。

そう、かつて『クソツタレな奴』に言われた言葉…

『お前のスタンド。どうやら一対一の戦いには向いてないようだな。動きがスツとろい
ぜ』

この吉良吉影…一度失敗した身。ヨシカゲ・キラとして生きる以上、以前と同じではダメだ。

我がスタンド『キラーキイーン』は確かに一対一には向いていない。それゆえ格闘セ
ンスだけでも磨いておこうと思つてジムに通い出した。

無論、私が戦う時は『必ず殺さなければいけない戦い』。

『殺すための格闘センス』を磨かなくてはいけない。

「私のこの霸王流も同じです。戦いで勝ち抜きそして：殺す技です。だからあなたの事を調べさせてもらいました。ヨシカゲ・キラさん。私は確認したいのです。私の拳と貴方の拳：どちらが強いのか：」

なるほどそういう事か。しかし

「残念だが、私はそういう格闘は性に合わなくてね：悪いが失礼させてもらうよ」

「ツ!!では何故あなたはあんなに辛そうに格闘技を習つてたんですか!?」

「君みたいに強くなりたいとか、勝ち負けにこだわるとか、自分の流派のために戦うとか：私にはそういうものは無い。私には私の人生での目標がある。それを成すためのジム通いだつたに過ぎない」

私は後ろを向いて歩き出す。しかし彼女は負けじと私に話しかける。

「…あなたは一体：何を目標に生きているんですか：」

「そうだね：強いて言うなら、激しい『喜び』はいらない。その代わり深い『絶望』もない。『植物の心』のような穏やかな『平穀』というところ：かな」

再び歩き出しが、その前に振り返り：

「それと…変身魔法はデバイスを使った方がいい。肉体への負担がかなりかかるよ…そ

れじやあ失礼させてもらうよ』

△▼△▼△▼△▼△

「霸王つ子視点」

見抜かれていた：変身魔法も、デバイス不所持の事も…それに何だろう：変身魔法を解く。そこにはヨシカゲ・キラさんと同じくらいの私がいる。

「何故だろう…あのまま戦つてたら…殺されていた」

彼はきっと殺すとき、全く躊躇しないだろう。彼の言った『平穏』妨げるものがいたらきっと…

もしあれ以上彼を調べていたらどうなつていただろうか。

踏み込んではいけないと本能のようなものが訴えて来る。

クラウス…私はまだ…

「私はまだ…心が弱いのでしょうか…」

△▼△▼△▼△

～キラ視点～

始末すべきだつただろうか：私の事を調べたと言つたが：小娘程度に調べられる分
けないと思うが：

あの髪の色、どこかで見たな。おそらく同じ学院で通つてゐる。変身魔法を解いたら
だいたい私と同じくらいだろう。

「ん？ああ、すまない『エリリさん』。一人で考え込んでしまつたね。さあ、一緒に夕食
を食べよう。僕の口に運んでくれるかい？うれしいな：ククク：」

嫉妬系男子はスタンド使い その①

いつものように授業を受ける。学生として当たり前の義務であり、自身の将来の為の時間である。

こうして授業に没頭できるのもこのヨシカゲ・キラが今日も平穏な生活をしているという事。実にいいことだ。内ポケットに手を入れ中にいる『彼女』を優しく撫でる。今日も一緒に『ミツドジエルマン』のサンドイッチを買いに行こうね：

「じゃあこれで授業を終わりにする。起立！」

『ありがとうございました』

さて、いくとしようか…ククク…

△▼△▼△▼△▼△

出来立てホカホカのサンドイッチを買い、教室の席に戻り、頬張る。さくさくな歯ごたえとサンドイッチの中身の具が口の中で混ざり合つて一回飲み込むと、喉の奥に言つてしまい、味を感じれなくなつた喪失感と、再び噛み付いて口でその味を堪能したいという欲求に駆られる。要するに一度食べたらやみつきになる。

「とても暖かいさくさくなパンだね：君と選んだせいかよりおいしく感じるよ…（ボソ

ボソ)』

そんな『彼女』との至福の時を体験していると、隣では…

パクパク…

リンネ・ベルリネットが一人で弁当を口にしていた。(量が意外と多いな…)

しばらくそのどんどんおかずが減つていく様を見ていると、彼女が、私の視線に気がつき、さつきまで自分の食事風景を見られていたのが急に恥ずかしくなったのか顔を真っ赤にして俯いてしまつた。しまつた…さすがに失礼だつたか…

「すまない、おいしそうな弁当だつたんでね…つい目移りしてしまつた…」

「い、いえ。別に気にしていません…」

いかんいかん…彼女の虐めは終わつたが、このヨシカゲ・キラの本能が囁いている。彼女は不幸の有頂天状態だ。関わつたらまずい…とね。

まあだからといって見つめていたのは失態だつたな。気をつけよう…ん?

「あ、あのキラ君…」

「なんだい、ベルリネットさん…」

「よかつたら…ど、どうですか!」

「弁当のおかず…?」

何を勘違いしたのか彼女は私に弁当のおかず分けてきた。しかしここで断つても変

に嫌な印象を受ける。なぜかクラスの男子が私の方をちらちら見てる。そういえば小耳に挟んだが彼女は男子に人気な女子だつた：気がする。得に興味も無いから記憶の隅に捨てておいたが…

「あ、あの…余計でしたか？」

「…いや、そんなことは無い。ありがたくいただくよ」

「!!どうぞ…」

（感）
「ありがとう…どれもとても美味しかったよ…」
「あ、はい！ど、どういたしまして…」

「…やはり『君』を放つておいてしまった…」
優しく『彼女』を撫でる。

「…やはり関わるんじゃなかつた…（小声）」

△▼△▼△▼△▼△

～リンネ視点～

べ、弁当を分けた…と、友達見たいな事を…私が!!つい、この間までそんなの夢のま
た夢だと思つてたのに…しかもあのキラ君に…

な、なんでだろう…急に顔が熱くなってきた…すごい心臓がバクバクいつてる…
それに自然と顔がにやけてきた…何か怖い…

『ありがとう…どれもとても美味しかったよ…』

さつき言われた言葉が頭の中で反響している。とても優しそうな顔だつた…またす
ごい恥ずかしくなつてきてしまつた。じゅ、授業内容が頭に入つて来ない…



♪ ??? 視点♪

「クソ…」

ヨシカゲ・キラ…ツ!!

リンネちゃんと仲良くしやがつて…俺の方がリンネちゃんといつも一緒だつたのに
…わざわざ金持ちの親父に頼んでずつとおんなじクラスにいて、やつと虐めが終わつた
と思ったら、今度は…お前がツ!! キラツ!! お前が邪魔しやがつてツ!!

ぶちのめしてやるツ!! 俺には魔法でも科学でも無い…『選ばれた能力』があるツ!!
ぶつ殺してやるぞ…ヨシカゲ・キラアアアアアアツ!!

————理不尽な嫉妬が…キラを狙つていた

スタンド使いとスタンド使いは引かれ会う——————

△▼△▼△▼△▼△

♪キラ視点♪

帰り道：いつもは一人で帰っているんだが…

「…つけられている…」

視線を感じる…殺氣とも言える視線だ…この感覚…まだ吉良吉影だつた頃の時に似
てている…

「なにか…何かやばいッ!!」

後ろに一步下がるッ!!その瞬間ッ!!壁からさつきまで私がいたところに拳が生えて
きたッ!!

「ば、馬鹿なッ!!」、これは…『スタンド』ツ?』

拳は私に当たらず、地面のコンクリートに当たり、小さいへこみを作る。

「…当たらなかつたか…見えてないはずなのに。感のいいやつ…」

「はつ?!」

後ろを振り返ると、同じクラスの男子が一人立っていた。
さつきの言動、そしてこの殺氣ッ!!本体はこいつかッ!!

「だが、確実に俺の『マキシム』を当ててやる…ヨシカゲ…………キラアアアッ!!」

「ま、まさかこの町にスタンンド使いがいるなんて…」

だが、このヨシカゲ・キラ…スタンド使いとわかつた以上、有無も言わざず始末すると心に決めていたッ!!

△▼△▼△▼△▼△

スタンドーマキシム

本体—クレイバ・インレルト（同じクラスの男子）

破壊力—C

スピード—B

射程距離—C 5 m

持続力—A

精密動作性—B

成長性—E



u
e
d
:

↑
T
o
B
e
C
o
n
t
i
n

嫉妬系男子はスタンド使い その②

――――――クレイバ・インレルトの背後からまるで背後霊のように：守護霊のように：それは出てきた。先ほどヨンカゲ・キラに殴り掛かってきた拳の正体。あれは壁から拳が生えてきたんじゃなくて壁の向こう側から殴り掛けってきたのだ。それは幽霊のように壁を透け通つて、そして好きな部分を実態化させる事ができる。さらに、それは一般人には見えない。それは同じ守護霊同士じゃないと触れられない。守護霊が傷つけば、本体の同じ部分も傷つく。

強力な一心同体の守護霊、『スタンド』。

そして『スタンド』を扱えるもの達を…

『スタンド使い』という――――――

△▼△▼△▼△▼△

「当ててやる。『マキシム』のパワーは人間の子供一人をグシャグシャにするくらい訛無い…」

スタンドツ!! 壁の向こう側から移動させてきたのか…スピードがそれなりにあつて射程はおそらく5m程…コンクリートのへこみから私の『キラーキイーン』よりもパワーがある訳ではなさそうだ…

しかし重要なのは、こいつが私も『スタンド使い』という事を知らない事だ。ああいうタイプは慢心が激しい。普通以上の力を手に入れた事で調子に乗っている…

『マキシム』ツ!!

転んだ振りでもするか…

転んだ事で奴のスタンド…『マキシム』というスタンドの拳は当たらない…

転んだ私を勘違いしたのか奴はゲスなニヤつき顔で私を見下ろしている。

「怖いか?まあ一般人のお前には何が起こっているのかわからぬみたいだからな…でもお前が悪いんだぜ…リンネちゃんに近づいたお前のせいなんだよツ!!」

再び拳を当てに来るが、かわす。

「お前…思つたけどかなり感いいな。最初の除いて10発は叩き込んでるのに全部かわすなんてよ…まさか見えてるなんてありえないしな」

さて、どう対処すべきか…とりあえず避ける振りしてここまで誘導できたからよしとするか。

奴も気がついたようだしね：

「ん?へ〜…こんな人気の無い裏路地に逃げるなんてな…わざと誘導したのか…それともたまたまか…まあどっちにしてもてめえはぶつ殺すぜ!!」

「…私の名前はヨシカゲ・キラ。年齢は10歳。彼女はない。町外れの一軒家に住んでいる」

「は?」

「タバコとか酒とか…違法には手を染めていない。夜遅くとも8時には帰宅し11時には床につく」

「何言つてんだてめえツ!!」

私はゆっくり立ち上がり、腰についた汚れを叩き落として奴を見る。
「これは決まりでね。殺す相手には私がどうして君を殺すのか、殺すための理由を言つ

て いる んだ よ。 私 は『植物 の 心』の ような『平 穏』を 願つて 生き て い て ね： そ れ を 邪魔 す る もの は 誰 だろ うと……』

『これ が 私 の スタ ンド だ よ。 馬鹿 見た いに わざわざ 人 気 の 無いところ まで ついて 来て くれ て あ りが とう クレ イバ・イン レルト 君。

『今 夜 も 安心 し て 熟睡 する ため に……』

「お、 お 前 も……『お、 同じ 能力』ツ!!」

『キラーケイーン』： 私 は こ れ を そ う 呼んで い る…… こ れ 以 上 私 の 平 穏 を 脅か す 可能 性 が あ る 君 を……始末 させ て もら う』

『クソッ!! 勘 が いい の か と 思つたら 見えてた の か ツ!! お、 俺 を ナメやがつて ツ!! 『マキシム』の 能 力 を 食らわせ て やる ツ!!』

『マキシム』は 拳 を 私 に 向け ると 思つたら 隣 の コンクリート の 壁 に たたき付け た。

そしてもう片方の拳を私に向けてきた。

「何をする気だ…」

すると『マキシム』の拳からたたき付けた拳に接触しているコンクリートが光線のように発射されてきたッ!!

「これが『マキシム』の能力かッ!!」

「食らえヨシカゲ・キラツ!!」

かなりのスピードで光線化したコンクリートが飛んできたが…

『キラークイーン』ツ!!

しかし『キラークイーン』で弾けない威力では…

「…………すると思つたぜッ!!そのコンクリートは『マキシム』の能力で本当に光線化してんだぜえッ!!」

「何ッ!!」

ドスツ

!!

「これが『マキシム』の能力…拳で触れた物質をスタンンド内部にチャージして拳から光線化させて発射するッ!! 光線はすべてを焼き切り、焼き貫くッ!! 防御不可能の攻撃ッ!!」「な、なるほど…確かに防御不可能だ…軽率に拳で触れるんじやなかつたな…」「何言つてんだ? 光線化したコンクリートがどうなるか俺はまだ説明してねえぜ?」

「何…?」

貫かれた右手を見ると、それは…

「こ、コンクリートが光線の形でストップしている…」

コンクリートが光線の形で元に戻つていてコンクリートの棒が右手に突き刺さっている状態になっていた。

「光線化したものは自由に元に戻すことができる。チャージしたらその物質はなくなつちまうが…この裏路地にはたくさん物質がある。つまりだな…キラ…てめえは自ら俺の土俵に飛び込んで来ちまつたんだよおおおおおおッ!!」

「そうだな…しかし、それは君にも言えることだ。このコンクリートの棒は君の腕から出でているな…」

「ああそうだ。今からこのコンクリートを再び光線化させてお前をバラバラに切り刻ん

でやるよおおおおおツ!!

そうか。『キラーケイーン』はすでにこのコンクリートに触れているのに……
「君の拳に近い部分のみを……起爆する」

カチッ

「へ？」

ボグオオオオオオンツ!!

「自分の実力を過信するのは最も恐ろしいことだ……この世すべてにいえる事だよ……まあ
もう聞く耳すら無いだろうけどね……」

スタンド—マキシム

本体—クレイバ・インレルト

爆殺……死亡

ヨシカゲ・キラは霸王が嫌い

その①

『——次のニュースです。先週から行方不明の○○学院に通うクレイバ・インレルトさんですが、未だ発見されず、最後の目撃されているにも学院の昇降口にある監視カメラの映像のみで、それ以外の手がかりはまだ見つかっておりません。ミッドチルダでは最近こういった少年少女の行方が分からなくなつたという事件が増えています。情報では今年に入つてすでに300件以上の捜索届けが出されているとのことです』

『いやあ……ミッドチルダも物騒になり来ましたね。もうすぐ『インターミドルチャンピオンシップ』もあつて人がたくさん集まろうっていうのにね～』

『そうですね。なぜ少年達は忽然と姿を消したのでしょうか？まるで手がかりがごとこの世から消えたような……あ、ゴホン。し、失礼しました。では次のニュースです。もうすぐ始める『インターミドルチャンピオンシップ』ですが——』

心地よい、まるで赤ん坊のように起床し、朝食の準備をする。卵を割り、ボールに入れ、かき混ぜる。その間にフライパンに火であつてつつ油を引く。そこにウインナーを入れ、火が通つたと思ったらささらに先ほどかき混ぜた卵を投入し炒める。塩胡椒をまき、皿に盛り付ける。次に食パンをトースターに入れ、焼く。焼いている間にコーヒー

を入れ、冷蔵庫からマーガリンを取り出す。パンが焼き終わるとその熱々のパンにマーガリンを塗り込む。マーガリンはパンの表面の熱さでじゅわあという感じに溶け出し、良い香りを漂わせる。そのパンを皿におき、椅子に座つて時計を見る。

(7:30…まだ全然時間があるな)

テレビをつけ、パンにかじりつきながらニュースを見る。やつていたのはここ最近ミッドチルダで起こつている行方不明者達の話だ。出された名前や顔がどこが見覚えがある。

「…す、ハッチャケ過ぎたか…ほとんど私が始末したやつじゃないか…」

中には先週始末したスタンド使い…インレルトの姿があつた。

スタンド使い…私以外にもいたことも驚きだが、重要なのはそこではない。

ここに「矢」があるかどうかだ：

「矢」とは、文字通り弓で打ち込む武器である。しかしその「矢」ただの矢ではない。その矢じりで傷つけた者をスタンド使いにしてしまう矢なのだ。

以前私が住んでいた杜王町にもその矢があつた。

いや、そもそも矢の一本は私の家にあつた。私の『キラーケイーン』も父が持ち帰つて来たその「矢」によつて発現したものだ。

「もし「矢」があるなら絶対に破壊しなければいけない。このままスタンド使いが増えればいつか私の正体に感づく者が必ず現れる……こんどこそ……この吉良吉影……幸福に……生きてみせるッ!!!!」

私は朝食を終え、準備を整えそのまま学院へ出かけた。



「学院」

「聞いた？」

「うん、インレルト君でしょ？ 行方不明なんだって」

「最近増えてるらしいよ！ そういうの」

「こわい！！」

さすがにニュースで取り上げられればこう噂は広がるな。だが幸い今はまだ爪が伸びる時期じゃない……ほどぼりが冷めるまでじつとしているか……

「はーい。みんな席につけーー」

担任の教師の声でみんなすぐに席に戻る。中には机で寝そべっているもの。終わつていはない課題をやつているもの。本を読んで話を聞いていないもの。様々だ。

「聞いたと思うけど、クレイバ・インレルト君がここ最近登校してないのは彼の行方が分からなくなっているからだ。だが未だ手がかりが見つかっていない。もし何か知つているなら君たちの方からも何か教えて欲しい」

まあ学校も対策は取るか……しかし参つたな……こうもおおことになるともう迂闊に行動できないぞ……

「それじゃあ、授業はちゃんとやれよ——解散」



放課後

今日も何事もなく、目立たず、真面目に1日を送れたな。本当なら今から新しい『彼女』見つけに行くが……今日はやめておこう……二の舞はごめんだ。

「お待ちしてました…ヨシカゲさん」

「また君か…霸王イングヴァルト…」

「そう呼んでいただけるのは光榮です。今日こそ決闘していただきたく参上しました」「断る。私は戦いが嫌いだと…何度言えばわかるのかね。争いなど…勝つても負けても待つてるのは不幸だ」

最近帰り道に必ず出会うこの女…『自称』霸王イングヴァルト…本名はアインハルト・ストラトス…同じ学院かと思つたが別の学院の中等部の生徒だつた。予想通り、彼女は変身魔法で15、6歳に化けている。調べたらすぐにわかつたよ。

しかい面倒なのにつけられた…ここで始末してもいいが…ここまで決闘にこだわり自称霸王を名乗るほどだ…体術も魔法も一流に近いんだろう…いくらこちらが触れれば勝ちというアボバンテージがあつたとしても、触れる前に意識を持つていかれる…面倒だ。

「そもそもなぜそんなに私にこだわる？君に何かした覚えも、された覚えもない。君は霸王として上を目指しているんだろう？それなら格闘者でもない私に構つている時間などないんじやないのかね？」

「それは…貴方の拳g「見つけたぜガキイイイイイ!!!!」！」

「なんだ？誰だ」

後ろを向くとそこには、腕にギブスをはめ、顔が殴られたかのように腫れ上がった男が立っていた。男は霸王をじっと睨み、私のことは眼中にないようだつた。

「てめえのせいで…てめえのせいで!!俺はもうストライアーツができねえんだよおおおおお!!どう責任とつてくれるんだ!?ええ?」

「……戦う前に私は確認したはずです。たとえ怪我をしてもそれは貴方の責任であつて私は責任をおわないと「んなことはどうでもいいんだよツツツ!!」つく」

「待てよそこ奴!!」…チツ

「俺のこんな無様な姿を見たんだ…ただで返すと思うかよ?痛ぶつて俺のことが怖くてしようがないってくらいにしてやるぜエエエエ!!」

「待つてください!その人は関係ない!!」

「死ねガキイイイイイイイイイイ!!!!」

「無茶苦茶な奴だ…」

私は裏路地の方へ走る。

「待てやゴルラアアアアアアア!!!」

「うるさいハエみたいな奴だな。」

まあここは入り組んでいる。あの霸王が来るまでせいぜい3分はあるだろう。

「行き止まりだなあ：逃げられなくて残念だつたな?!?俺の黒歴史に立ち会つたてめえの『運命』恨めエエエエええええ!!!」

全く

「いいだろう…いたぶられて赤つ恥をかくのがどちらか：命を運ぶと書いて運命。よく言つたものだ…」

奴の振りかぶつた拳を

「キラーケイーン」

ジャキツツツ

切り裂く

「え？……お、俺の腕どうなつて…」

「ほら…落し物だ…ちゃんと持つてろよ」

落ちた奴の腕を奴へ放り投げる。腕が奴の頭に直撃した瞬間、

「木つ端微塵に消し飛ばしてやる」

力チツ

ボグオオオオオオオンツツツ
!!!!!!

「あの世に運ばれたには君の命の方だつたな…忠告しつくが知らない小道で目を覚した
ら振り返らないのが身のためだ…つてもう聞こえないか…ククク」

理不尽男

爆死

↑
T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

ヨシカゲ・キラは霸王が嫌い

その②

ボグオオオオオオオオンツツツ!!!

「…やつてしまつたな。だがああいう奴はしつこいからな。始末できてよかつたというところか」

キラーケイーンを引つ込め、時計を見る。この裏路地に逃げ込んで1分経つた。もうじき霸王がここに迫いついて来る。その前に逃げなければな。

「全く…あの女に関わるとろくなことはない…幸いここには監視カメラはない。キラーケイーン！飛ぶぞ！」

キラーケイーンの脚力を使い壁を超えて建物の上に着陸する。

「さて、このまま帰るとしよう」

これで今夜も安心して熟睡できる。この吉良吉影に二度目の失敗はない。



～翌日の学院 昼休み～

うーん。やはり『ミツドジエルマン』のサンドイッチはうまい。なんども食べてられる味だ…しかし管理局による警備が強まって、最近は迂闊に動けないせいで『彼女』がない…爪の伸びる前に警備が解除されればいいのだが…

「…まだ時間があるな…手洗いにでも行くか…」



～男子トイレ前～

「ふう…これでしつかり授業に集中できる。もうすぐ中間テストだからなあ…しつかり勉強しないとね」

もうそろそろ授業が始まるな。急ぐとしよう。

「――――いや、てめえは授業に出る必要はねえぜ？ 猫・スタンド野郎」

ビュオッ!!

「なにッ!? き、キラークイーン!!」

飛んでくる何かをキラークイーンで受け止める!! ズシリとした衝撃がキラークイー

ンを通して私の腕に響く…しかし…

…スタンド…スタンドと言ったのか…今そこにいるやつは！？

その声の主はトイレの個室からキイイ…という音を立てながら現れた!!

しかし…その姿は!!

「―――バカな！キラークイーンは確かに貴様を始末したはずだ!!なぜ生きているツ
!!?」

「その答えは単純だぜガキ…俺もお前と同じスタンド使いで、お前が昨日殺したのは俺
のスタンド能力で作った影武者だ。まあ、難点として、作った影武者はみんな狂ったキ
チガイになってしまふことだな」

そこには：昨日確かに殺したのははずの男が立っていた!!

△▼△▼△▼△▼△

スタンド名—バーサーク・バーサーカー

本体—エイギス・カタルスファ（元ストライクアーツ有段者）

破壊力—B

スピード—A（影武者の時はD）

射程距離——A

持続力——A

精密動作性——E

成長性——D

△▼△▼△▼△▼△▼△

～三人称視点～

男：エイギスとキラは対峙する。

キラは冷静になろうと思い、相手から情報を聞き出すことから開始した。

「影武者……それが貴様の能力か？」

「そうだ……だが、もともとお前が狙いだつたわけじやねえぜ？ほんとの狙いは霸王を名乗るあのクソガキだつた。この能力で痛めつけた後に、じっくり辱めてやろうと思つたんだがな……」

そこまでいうと男はキラに目を向ける。

「たまたまそこにお前がいた……身につけたばかりのスタンドをちよいと試したくなつたのと、霸王への見せしめにぶつ殺してやろうかと思つたのに……」

ゾオオオ

そんな音を立ててエイギスの背後から黒い靄ができる。

キラには確信できた。溢れるスタンドエネルギーを…荒々しいエネルギーを!!
それこそエイギスがスタンド使いである証明!!

スタンド!!

「まさかお前も俺と同じ能力を持つてるとは…おどろいたぜ…同時にワクワクしたぜ!!
身につけたばかりではあっても!俺の力がどこまで通じるのか試したくなつたぜ!!」

黒い人型の靄は素早い拳をキラに向けるッ!!

しかし!!

「キラークイーン!!」

ズギュンツ!!ガシイツ!!!

「へえ…早いしおまけに…力強え…それがお前のスタンドってやつか…」

「このヨシカゲ・キラ…貴様のように戦いを好む奴らとは相入れないと確信できたよ…
どいつもこいつも強くなりたいだとワクワクするとか…戦いを嫌う私とは対極に存
在し、理解できないことがわかつた」

キラはエイギスのスタンド、『B^{バーサーク}・Bバーサーカー』の腕を払い、距離を取る。

エイギスはすでに戦闘態勢に入りつつ、ニヤリと笑みを浮かべ、キラに問いかける。

「ならどうしてスタンドを出した?スタンド使いにとつてスタンドを出すということは
戦うつてことだぜ?」

「私は心の平穏を願つて生きている。そのためには私の正体を知つたものは生かしておけない：スタンド使いなら尚更ね：私が戦う時は！私の正体を知つたものとのみの戦いだ」

「それに」と一言呟くと、キラはあの構えに入る。

「キラークイーンは先ほど貴様のスタンドの腕に触れた。起爆する！」
カチツ

キラは躊躇なくスイッチを押した。

ボグオオオオオオオンツツツ!!

「――――なんだとおおおおおお!!!!?

「あぶねえあぶねえ：昨日戦わなければ死んでたぜ」

しかし爆発の中から出てきたのは無傷のエイギス！！

「忘れたか？俺の『B・Bバーサーカー』の能力を：影武者つてのは切り捨てるものだ。切り捨てた奴の痛みが俺自身に返ってくると思うか？」

キラは見た！エイギスのスタンドには腕がなくなっていた！
キラーケイーンで触れた方の腕がなくなつていたのだ!!

「まさか…」

「さつき殴りかかった時：『B^{バーサーク}・Bバーサークー』は殴りかかった腕だけ影武者として機能してた。だからスピードも人並みに遅かつたし、お前の能力が発動したのももう俺の腕ではない影武者に発動した!!影武者のダメージは絶対俺には帰つてこない。せいぜい爆風で髪型が変なふうになつたつてくらいか？」

「く…影武者…そういうことか…だがそれがどうしたというんだ？授業開始まで残り2分。走れば十分間に合う。貴様を始末してもな。キラーケイーン!!」

キラはキラーケイーンを出し、ラツシユを畳み掛ける。

「おおつと！その手には触れたくねえな！『B^{バーサーク}・Bバーサークー!!』

ドゴオ!!ブシャアアアアアアア

すると『B^{バーサーク}・Bバーサークー』は近くの便器を破壊し噴水のように水しぶきを上げ

させる！

「く！前が！」

「がら空きだぜエエエエ!!突きだせ

『B^{バーサーク}・Bバーサークー!!』

ドドドドッ!!

「ウグアア…」

キラは鋭い『B^{バーサーク}・Bバーサーカー』の拳でキラークイーン^ゴと壁に激突する!!

「ごは…な、なんて災難だ…このヨシカゲ・キラが…」、こんな目に…

(つ、強い!!)

↑To Be Continued

ヨシカゲ・キラは霸王が嫌い

その③

(つ、強い…)

キラは地面に倒れ伏せていた：壁に叩きつけられた衝撃で、体がいうことを聞かず、更に『B^{パー}サークル・B^{バー}サークル』の凄まじい一撃がキラークイーンを通してもう腹に来ていた：

(骨に傷は…ツ…入つてないようだ…しかし…)

「ほー…あの一撃が食らつてまだ意識があるとは…感心したぜ！鍛えればきっと俺みたいい格闘者になれたんだろうなあ」
 (このままでは…)

「それいやつてみてわかつたぜ！…てめえのスタンドはサシの戦いには向いてねえようだな！素の『B^{パー}サークル・B^{バー}サークル』の攻撃に全く対応できてねえぜ…まあ相手がこの元天才格闘者エイギス・カタルスファなんだからしようがねえけどなあ…お前のスタンドの能力も理解したぜ？触れたものを爆発させるだとか、触れたものを自由に爆破できるとか…そんな感じだな…とにかく手にさえ注意していれば楽勝だぜ…」

(…ッ?!やられる!このヨシカゲ・キラがやられてしまう!!)

キラは確信した。このままでは負ける。能力はバレた…性能は差がある…触れなければ発動できぬキラーケイーンでは、あのスタンドとは相性が悪かつた…

(触れて起爆してもすでに影武者に変えられたら意味がない…そもそも近づこうとする前に叩き潰されるツ…なんとかしなくては…なんとかしなければ…)

「さあて…スタンドの使い方もだいぶなれて来たぜ…初戦がお前みたいな危ないやつでよかつたぜヨシカゲ・キラ…スタンドバトルは正真正銘の死線つてのがわかつた…」

(く、来る!!)

エイギスは構え…大きく踏み込んだッ!!

「だが…触れなければ俺の勝ちだ!取ったアアアアア!!!」

『バーサーク B・Bバーサーク』の拳がキラの目前まで迫り…

キヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラ…

「…? なんだ今のは？」

拳が鈍る！ その隙をキラは逃さなかつた！

「ガードしろ！ キラーケイーン!!」

「しまつた!!」

対処できないスピードだが… 一瞬の隙で落ちるスピード!!
キラーケイーンでも対処は可能だつた!!

「ハア…ハア…ハア…」

「…まだガードする余裕があつたのか… ちよいと鈍つたとはいえその状態のスタンドで
俺の『B^{パー}サークル』を止めるとは思わなかつたぜ…」

エイギスはニヤケながら喋るが、徐々にその顔を睨み顔に変える。

「…だが… その『手』を動かしてみろ… その瞬間、お前が能力を発動する前にもう片方の
拳でテメエの顔面をグチャグチャにしてやるよ…」

「ハア…ハア…ハア… ところで… 今何時だね？ 授業開始までの時間が迫つててね… 君を…
始末した後… ちゃんと間に合うのか不安なんだよ…」

「はあ？ テメエ… 何言つてやがる… 状況読めねえのか？ 始末されそうなのは… お前なん
だぜ？」

キラは息絶え絶えの顔でしかし余裕ある表情でエイギスを睨む……

「そういえばさつき……君は言つたよな？ 私のキラークイーンは……手にさえ注意してれば勝てるスタンドだと……」

「ああそうちだぜ？ 実際……テメエは触らずとも能力を発動できるならこの近距離……この睨み合つてこの状況でもうすでに爆破してるものなあ……」

「それが思い込みというやつだ……この世で最も警戒するのは思い込みだ……それが正しいと一度信じたら最後……人間はそれを常識と捉え、例えそれが間違っていたとしてもその常識を改められない……」

「さつきからテメエ何つて……」

キヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラ……

「ま、またこの音だ!!」

キヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラ……

「ど、どこから聞こえているんだ……ッ!?」

キヤラキヤラキヤラキヤラキヤラキヤラ……キヤラ！

それはエイギスの肩に既に居た。

『コツチヲミロ…』

「君を始末する…我がスタンド…キラーケイーンの『第二の爆弾』で…必ず」

力チツ

ボグバアアアアアアアアアンンンンツ



キラは肩から先がなくなつたエイギスの口に靴の先を突つ込む。そのせいでエイギスは叫べない：

「おいおい：何を叫んでいるんだ？私は君より年下で、君みたいな格闘者より体が弱いのに壁に叩きつけられても叫び声をあげなかつたぞ？」

「う、…あほ、…」

エイギスは痛みで既に汗ダグで顔は涙と鼻水と血でグツシャになつていた。

「私を見習うんだよ!!ええ?」

「んん!!ンンンンンンンンンツ!!!ザザザザザウウウツ!!!!」

更にキラは足で肩のでかい傷口に蹴りを何度も入れる。その痛みはどれほどか…叫び声でわかる…

「ふう…さて時間は…後1分あるな…君を始末するのに10秒はかかるないが…その前に一つ聞いておきたい…」

「フー…フー…??」

「君はどうやらつい最近スタンド使いになつたようだが…どうやつてなつた?」

ズボツ

キラはエイギスの口から足を抜き、髪の毛を驚掴みにし、持ち上げ、自分と目線を合わせさせる。

「ハア…ハア…お…俺は…裏路地で霸王に負けた後…へ、変な男に会つて…」

「それで?」

「よくわからない刃物で刺されたと思つたら…これが使えるようになつてた…」

(刃物…)

「それで? その男は何か言つてたか?」

「さ、才能のあるものを探してゐるつて言つてた…強いスタンドの才能を持つた人間…それで…ハア…ハア…息子を殺したスタンド使いを殺すつて…」

(息子…殺した…)

「その男の名前は? 聞いてないか?」

「い、言つてた…」

「これが最後の質問だ…言え。そいつに名を…」

「ジョイル・J・インレルト：あの資産家：インレルト家の当主だ」

↑
T o B e C o n t i n u e d

クソッタレ共の逆襲

その①

「…インレルト家…」

元は一般的な商人の家だつたが、現当主の二代前…パジル・インレルトが無人世界にて超高密度の魔力結晶体：『ロストロギア』を手に入れ、それを元手に管理局などにもパイプができたりなどして超資産家となつた。

そこから管理局の古代遺物管理部の機動課、第六の部隊…通称『機動六課』に配属して居たジョイル・ジョースターと孫娘が結婚…ジョイルは姓をインレルトに変え、二児の父となつてゐる。

ニュースや、新聞にもよく見かけるが…

「なんというかことだ…この吉良吉影がこんな…こんな目に…」

先日始末したスタンド使い…エイギス・カタルスファアがいうには奴はこのジョイル・インレルトの手によつてスタンド使いになつた。

ジョイル・J・インレルトがスタンド使いを増やす理由…それは…

△▼△▼△▼△▼△

「昨日・学院にて」

『つまり貴様はその息子を殺した犯人を探しているジョイル・J・インレルトというやつにそそのかれたというわけか・犯人に日星は付いているのか?』

『ヒイ…ヒイ…わからない…でも奴は…犯人はスタンド使いつて決めつけて居た…』

『その根拠は?』

キラはエイギスの髪を持ち上げ、自分の顔に近づけさせる。

『イギヤ…あ、あんたさつきこれが最後の質問だつて言つたんじゃn『質間に答えろ!!!貴様…疑問文には疑問文で答えろと教わつてきたのか!!』ヒイイイイイイイイ!!わ、わかつた!!話す!話すよおおおお!!』

エイギスは顔を更に恐怖で歪めながら震えた口で喋り出す。

『こ、根拠はここ最近の行方不明者が多くなつてゐるにもかかわらず手がかりがこれっぽつとも出でこないからだつて…!!』

『ツ!!!』

キラは顔をひきつらせる…

(キラークイーンでも証拠完全消滅が逆に仇になつただとおおおおお…いや…たつた

それだけのことでの犯人をスタンド使いと決めつけるのか!?この世界には魔法があるのに…魔法を使えばキラーケイーンほどではないにしろ証拠は消せる!!)

『…そのジョイル・J・インレルトもスタンド使いなのか?』

『そ、そうだと…思う…何をそんなに怯えてるんだ…ハッ?!』

そこでエイギスは何かに気づいたかのように体を震わせる。

『まさか…いや、でもあなたのその能力なら…』

エイギスはキラと戦った経験を元に考え、その答えにたどり着く。

『ま、まさか!インレルトの息子を殺したのは…お m (カチツ)』

ボグバアアアアンンンンツツツツ!!!

『なんということだ…』



↙通学路↙

まさか…クレイバ・インレルトを殺したことがこんな裏目に出たとは…思えば、これもリンネ・ベルリネツタ…彼女に関わらなければ…こんなことには…

この吉良吉影が…明日もあるかもしない戦いに…ストレスを感じてるなんて…

こ、こんな絶望感とストレス…私の生活には…本来なかつたはずなのに…
 「クソツタレ…とにかく…学院に…行かねば…」



「学院」

ヒソヒソ…

ヒソヒソ…

なんだ？今日はやけにヒソヒソ喋ってるのが多いな。ん？私の教室の前に…人だかりが…それとなく聞いてみるか：

「すまない何かあつたのかね？」

「あ！キラくん。みてよアレ」

アレ？アレとは一体…

「君のクラスのベルリネットタさんを前いじめてた人だよ！指を大怪我してしばらく休んでたらしいけど…復学してきたんだって！」
 …指を大怪我…それ殺つたの私だ。



しかし…復学してくるとは…普通指がぶつ飛んだらトラウマでも抱えて布団にくる
まつてはるはずなんだがな…ま、私にそんな経験はないがね…

「ベルリネツタ」

「ツ!!…はい…」

「放課後…魔法準備室に来なさい…破つたらどうなるか…わかるわね?」

「は、はい…」

また始まつたか…懲りないな…しかし前は三人でいじめてたのに…今では一人か…

(ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ…)

「…?」

ああ…ベルリネツタか…震えているな…まあ無理もないか…再び悪夢が舞い戻つて
来たんだからな…

「全員席に付けー!」

さて、今日も頑張るか…

△▼△▼△▼△▼△▼△

ゞ 放課後ゞ

(ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ…)

行つたか…

ま、せいぜい頑張つて少年時代を過ごしてくれば…

「お、キラ。ちょっと待つてくれ」

「…？先生。どうしたんですか？」

「いやこの資料を魔法準備室に届けて欲しくてね」

「わかりました。魔法準備室で…」

ん？魔法準備室？

「ありがとうございます。私はやることあるから…それじゃあ気をつけて帰れよ」

「ちょ、ちょつとまつ…しまつた…」

まさか…今日に限つて…魔法準備室だと…？

ベルリネツタとクソツタレがいるところじやないか!!

△▼△▼△▼△▼△

（魔法準備室前）

「クソ…今日に限つて…恨むぞ教師…」

少し不機嫌な状態で廊下歩く。これから行くところは面倒なことがある。

もちろん今日復学して来たんだってあのクソッタレだ。

「着いたか…さてどう書類を置いたらいいか…」

教師の机におけばいいのだ。置いてさっさと帰れば私の勝ちだ：見つかったら私の負けだ…：

静かに入り…奴らに見つかる前に…書類を置いて出る…ツ！

「キラークイーン…慎重にドアを開けろ…（ボソ）

スウー…

「…………!!」

「…………」

「…………?」

「…」

よし…奴らは奥で何か話している。

今のうちに…

シャアアアア…

「なん…だと…!!？」

へ、蛇だ!!背後に蛇がいる!!?
『シャアアアアアア!!!』

ガブチユ…!

「うぐ…か、か、噛まれた…!」

!!?

さ、さわれない!!ひつぺがせない!!こ、この感じは…

「す、スタンド!!…だと?き、キラーキイーン!」

このクソ蛇!!ぶつちぎつてやる!!

「いたツ!!誰かそこにいるの!!?」

ダメージがあのクソツタレ返つたつてことは…間違いない…休む前は確かにスタン
ド使いではなかつたがあの小娘…スタンド使いになつてゐる!!

そしてこのクソ蛇のスタンドの本体はあの小娘!!

このまま戦つてもいいが…ここにはリンネ・ベルリネツタもいる…正体をバラすのは
リスクがある!!

「…痛いわね!!ベルリネツタ!!そこから動くんじやないわよ!!」

しめた!!廊下に出る!!

ガラア!!

△▼△▼△▼△▼△

♪廊下♪

「あんたが：私の『リーファス』を掴んでるのね：確かに名前は：ヨシカゲ・キラ…」「やはりこの蛇が貴様のスタンダードか…ならこのまま…引き千切る！」

リーファス呼ばれたスタンダードをキラーケイーンの握力で引き取ろうとするが：「無駄よ：リーファスはすでにあんたの骨に到達したわ!!」

「こ、これは!!」

う、腕がフニヤフニヤに!!ま、まるで骨が丸々なくなつたみたいに：ハツ!?

「これが…貴様の能力か：骨を奪う能力…」

「ふふ…そうよ：リーファスは一度食らいついたら離さない…絶対に。そしてそのままそいつの骨を好きなだけ奪う…あんたの全身の骨がなくなるまで…何分かしら?」

「こ、このクソッタレが：!!」

↑ To Be Continued

△▼△▼△▼△▼△▼△

スタンダード名——リーファス

本体——クソツタレ（いじめつ子リーダー）

破壊力——D

スピード——A

射程距離——A（100mほど）

持続力——C（一人の骨を吸い尽くすのに約5分）

精密動作性——E

成長性——B



クソッタレ共の復讐 その②

「うおおおおおおおおおおお!!!!」

う、腕の感覚が！骨を吸い尽くすスタンド…ま、まずい！どんどん骨がなくなつてい
くッ！」

「吸い尽くしなさい！『リーファス』!!」

「このクソ蛇！引っこ抜いてやる!!」

!?

な、なんだこの感じは…取れない！まさか吸つている時は骨と同化しているのか？
こ、この距離ではこのクソ蛇を爆弾に変えることはできない！そうすれば私まで吹つ
飛んでしまう！！

「どう!?自分の体から骨がなくなつてく感覚は！？それはきっと誰にも体験できない素晴らしいことよ！感謝して死になさい！」

「このクソッタレが…この距離…私の能力の方が上だ！細切れにしてやる！」

ガクンッ

!?

あ、足に力が…いや違う…これは…

「足の骨まで…」

「あらあら！もう手遅れね。あとは胴体の肋骨と頭蓋骨のみ！安心しなさい！たとえ骨がなくなつてもしばらくは生きてられるわ！地面に這いつくばつてあんたを…優しくぶつ殺してあげる！」

「このクソカスがアアアアアアア!!!!」

く、右足がなくなつた…左足だけでは奴までに遠すぎる…キラーキーンの射程距離が短すぎる…!!

「ハア…ハア…」

だが落ち着け…このヨシカゲ・キラ…どんなピンチだろうと乗り越えてきた…奴は油断している。この私を完全に屈服させていると…

「教師から預かつたプリント…くしゃくしゃに丸め…爆弾に変える！」

投げろキラーキーン！触れただけで爆発する接触タイプだ！

油断しきつてるクソッタレは必ず手で弾く。その瞬間木つ端微塵に消しとばしてや

る!!

「…あなたの能力…触れて何かする能力ね。その丸めた紙も…触れてはまずいつてわけ！」

ドゴオオオオオン!!!!

「——!?…靴を投げて…接触弾を…」

「なんて火力…あれね。『触れたものを爆弾に変える能力』…つてどこでしょ」

「な、なぜだ!?なぜわかつた!?私は一度もキラーキイーンの能力を使用していない…
 「私ね。ずううつと考えてたの。この吹つ飛んだ指のこと。悩んでも悩んでも、答えを導き出せなかつた…………でも！『リーフアス』を使えるようになつてようやくわかつたわ。これは魔法じやない。スタンンドによる能力だつて。そしてあの時私に何があつたか…あの時私は…サンジエルマンの袋を開けようとしたわ」

ま、まさか…

「ベルリネットは…私のリーフアスが見えてなかつた…そして、さつき聞いたんだけどあのサンジエルマンのサンドイッチ…あんただつてね？そこで閃いたわ。

——あの時私の指を吹つ飛ばしたのは…ヨシカゲ・キラ…あんただつてね

こ、こいつ…ただのクソカスではない！広瀬康一や重ちーのようなタイプ！戦闘時に突如変化するタイプだ！

「あんたのスタンド…」の数メートルの距離で攻撃してこれないってことは近距離タイ
ブ…そして飛び道具が無いように見えるから能力の発動にはおそらく触れるとか…そ
んな感じだと思つたけど…見事にビンゴ…大当たりつてやつよ。景品欲しいわ」

なんてことだ…この吉良吉影が追い詰められてる！まだ2桁にも届かないガキに…
「おつと…そろそろ時間ね。一応感謝を言うわ。あんたが私の指を吹つ飛ばさなきや…
私はスタンドに目覚めなかつた…えーと…地球では確か…こういうのよね…グラッ
ツエ」

アーブルアーブルアーブルアーブルアーブル…

「…ところで、君はさつき完璧に我がキラーキイーンの能力を当てたようだ…」
「…死を前に全部暴露するつてこと？」

「私は死なないさ。一度すでに死んでるからね。話を戻すが…実はキラーキイーンの能
力は一箇所ずつにしか爆弾に変えられないんだ…そこで…だ。

もし爆弾に変えたものを二つに分けたらどうなると思うかね?」「何言つて…!まさか…!!」

彼女には敬意を表そう。この私をここまで追い詰めたのは彼女だけだ。
しかし、私は爪の甘いなんてヘマは二度はせんよ。

「さつき投げたプリントはちぎついていてね。万が一防がれることを考えて、『接触型』と『起爆型』に分けておいた」

そしてその『点火型』の方は彼女の足元に転がつている。さつき自信満々に『接触型』を弾いた時の爆風に乗るように投げ込んでおいた。

「わ、私の足元に!?さつきの爆風で!」

だが、学校の地面に倒れ、見下されるというなんとも赤つ恥をかかせたものだ…確實に…始末する。

「点火」

カチツ

ドゴオオオオオオオオンツツツツツツ!!!!!!

「フウ…スタンドは成長するのさ。相変わらず爆弾は一つしか設置できんが、それを二つに分けた場合のみ、『接触型』と『点火型』に分けることに成長した」

足腰に力を入れる。体は当然立ち上がる。なぜなら骨はすでに元に戻っていた。

あの蛇のスタンド…リーフアスだつたか？彼女が爆発すると同時に私から吸い込んだ骨を全て吐き出したようだ。

：少々気分が悪くなるが…フフ…無事ピンチを乗り越えたぞ！！

やはり我がキラークイーンの能力は無敵だ！この能力は必ずこの吉良吉影を平穏な人生へと導いてくれる！！

「くく…おつと…そうだつた」

「ガハツ…ゴハツ…そう…私の敗北つて…わけ？」

「そういうわけさ。点火型は少しづれがあるからなあ。君の場合下半身は吹っ飛んじ
まつたが上半身は綺麗に残つてるわけだ」

壁に這い蹲り、それでもこちらへギラギラした視線を向けてくる。

…氣に入らん。あの瞳…仗助たちを彷彿させる目だ。

「さて、それじゃあ木つ端微塵に消しとばしてやる。君も言つた通りこの指先に触れた
ものはあらゆるもののが爆弾になる…」

君の場合、学生リボンを爆弾に変えるがね…

「第1の爆弾！」

シヤアアアアアアアアアア
!!!!!!

「キラーケイーン!!」

背後から迫るリーファスを驚掴みにし、壁に叩きつける。

そう、その瞳だ。最後まで一矢報いようとする精神を持つ瞳…だから私は決して油断
はしない…

「これは親切な忠告だが、知らない道に行つても振り向かないことだ。前は言いそびれ

てね。言つておこう」

「…さつさとしなさいよ…」

点火。

ドゴオオオオオオソツツツツツツ!!!!

チツ…最後まで気に食わん奴だつた…

しかし…プリントを一枚殺つてしまつた…どうしたものか…

↓To Be Continued